



奇談

古今

英草紙

二

49
遠13
961
2



明遠
961
卷 2

古今新法英草紙 第二卷

三 豊原兼秋 音と触て國の豊喜と知る

兼秋の始後院 帝縁念は遠近と遊く 是置の

衣室の始なり 一時法師と考り 信よりかたり 竹雲をど押さる

兼秋の始後院 帝縁念は遠近と遊く 是置の

衣室の始なり 一時法師と考り 信よりかたり 竹雲をど押さる

兼秋の始後院 帝縁念は遠近と遊く 是置の

衣室の始なり 一時法師と考り 信よりかたり 竹雲をど押さる

兼秋の始後院 帝縁念は遠近と遊く 是置の

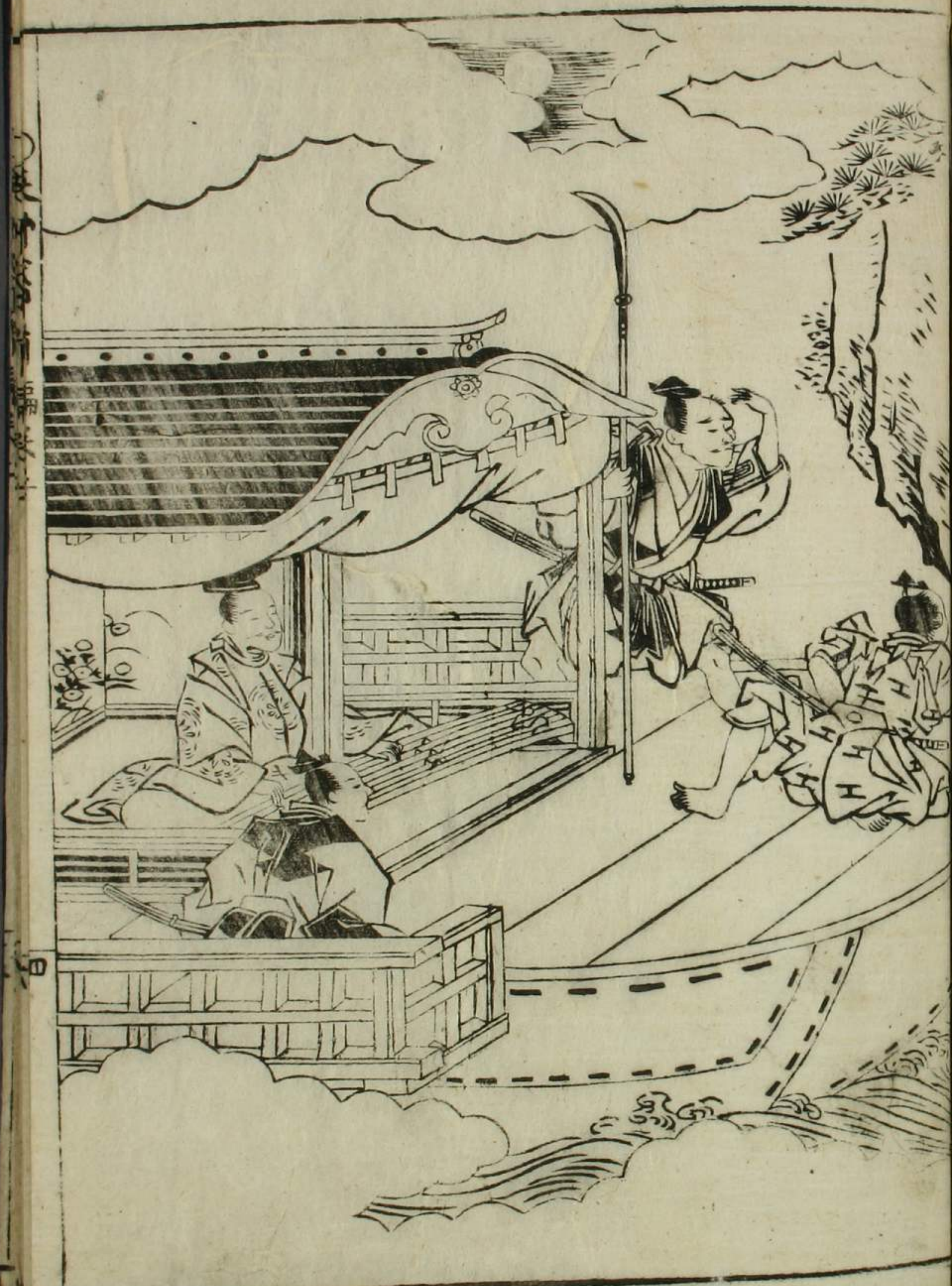
衣室の始なり 一時法師と考り 信よりかたり 竹雲をど押さる

兼秋の始後院 帝縁念は遠近と遊く 是置の

衣室の始なり 一時法師と考り 信よりかたり 竹雲をど押さる



古今新法英草紙 第二卷



妙り業を打てまゝと負荷を考へたりまゝと云ふとこゝにけり
 つかれ疲れては法は深敷月におありまゝなり三葉秋をこぼ
 かり法泉のどく大母一とありてはけり倒まり老人母を
 思へ抱きしりせし豊原に監獄をせしめたりといふは若夫のかりと
 吾ふ兼秋は若くは投獄され人を必死にたすはれと云ふは
 けりまゝに吐息して云ぬ兼秋を遠くしかりと思へばそふ
 一人とありては法と我と一体ありて果つるよハ時法を
 思ひぬるもあまはれらるる兼秋を老人云我思兼秋ハ時死後必
 兼秋浦の崖の道より兼秋を兼秋よと云ふ兼秋よと云ふ
 物わりと云ふ兼秋と遠くどと思ふなりと云ふ兼秋よと云ふ
 兼秋よと云ふ兼秋の傍にあり一辺の影をわたり時法の家を
 今も百日の長
 されと兼秋は兼秋とありて兼秋よと云ふ兼秋よと云ふ兼秋よと云ふ

